私立大学研究ブランディング事業
30年度の進捗状況

学校法人番号	061002	学校法人名	東北公益文科大学		
大学名	東北公益文科大学				
事業名	日本遺産を誇る山形県庄内地方を基盤とした 地域文化とＩＴ技術の融合による伝承環境研究の展開				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	960人
参画組織	公益学部（公益学科）、大学戦略会議、研究活動推進委員会				
事業概要	山形県庄内地方は「北前船寄港地」をはじめ文化庁の日本遺産に３件が認定されている。歴史的景観が数多く現存されている一方、踊りや民俗芸能等の無形文化財は少子高齢化や人口減少に伴い、新しい伝承手法と記録・保存方法が求められている。 本事業では庄内の文化財について、社会科学的研究アプローチを基に情報技術で地域資源に新しい視点を創る研究を展開し、庄内唯一の４年制私立大学として地域の魅力創出と発信に貢献する。				
①事業目的	山形県では文化庁の日本遺産に3件が認定されており、そのすべてが庄内地域に位置している。歴史文化が数多く現存する庄内地域で、建物や風景など有形の文化財は歴史的景観として保存されている一方、踊りや民俗芸能等の無形の文化財は少子高齢化や地域の人口減少に伴い、新しい伝承手法と記録・保存方法が求められている。 本事業では開学以来培った地域研究を基礎に、観光や創業につながる地域資源の掘り起こし研究を発展させていく。さらに、踊りや能等、人による「伝承」を必要とする庄内地域の無形文化財については、バーチャルリアリティ技術(VR)やモーションキャプチャ、CGアニメーション等、メディア情報の技術による新しい伝承方法を開発する。舞（黒川能・鶴岡市など）、踊り（酒田甚句・酒田舞妓など）、山伏修行（鶴岡市）、北前船航路（酒田市）等をIT技術でデータ集積し、さまざまメディアで発信の可能性を検討し、観光施設でのバーチャル体験等への応用についても研究する。 本事業の取り組みにより日本遺産を庄内地域のさまざまな文化資源と結びつけ、情報技術を用いて付加価値を高めることで、新しい庄内の魅力発信につなげることを目的とする。				
②30年度の実施目標及び実施計画	■研究目標 1. 地域資源の掘り起こしと分析についての活用計画の立案と実施 2. モーションキャプチャ等ITを活用した地域の民俗芸能の記録・実施 3. 民俗芸能の伝承環境構築の実施・研究状況の公開・見直 4. 地域資源を活用する人材育成プログラム実施 1～4　シンポジウムの開催 ■ブランディングに関する目標 ・公益大のブランディングにかかる状況把握と見直し・改善 ■研究に関する計画 1. ITを活用して見える化できる地域資源の活用計画に沿い、実行、公表していく。 2. モーションキャプチャ等ITを活用した地域の民俗芸能の記録の試行。 3. 民俗芸能の伝承環境構築の実施・研究状況の公開 4. 地域資源を活用する人材育成プログラム実施 ・地域資源を活かすためのIT講習会を試行する。 ・1～4の研究についてシンポジウムを開催し、地域研究の進捗状況を報告するとともに、モーションキャプチャで取り込んだ民俗芸能を公表し、地域住民から意見をもらう。 ■ブランディングに関する計画 ・ブランディング推進委員会の運営 ・公益大のブランディングにかかる状況把握。ブランドイメージ調査としてアンケート調査(オープンキャンパス(OC)、在学生向け、保護者向け)、公開講座、シンポジウム等を行う。 ・事業評価と研究評価を行う。				
③30年度の事業成果	1. 地域資源の掘り起こし分析 ・庄内地域の加茂地区、日向地区の景観・祭り・文化財について具体的に記録収集活動を行った。360度カメラ、ドローン等での撮影も試行した。 ・継続的に聞き書き、インタビュー形式での記録を行っている。紙媒体での保存、現在の行事等の動画撮影や古い写真のデジタル化などについては数回にわたり地域との打ち合わせを行い、今後の研究計画について意見交換を行った。 ・地域資源のアーカイブ化について、先進事例として岐阜女子大学のデジタルアーカイブの取り組みを視察するとともに、聞き書きの取り組みを回想法の手法と併せて応用できないか、検討を始めた。31年度から回想法手法も取り入れながら、研究を推進する。				

③30年度の事業成果	**2. モーションキャプチャー等ITを活用した民俗芸能の記録・活用** **3. 伝承環境構築** ・黒川能(山形県鶴岡市)の舞をモーションキャプチャーで7演目のデータ採取ができた。昨年取った酒田甚句のデータも含め、アニメーション化した。 **4. 地域資源活用の人材育成** ・高校生以下へ提供するプログラミング講座を実施。2.3年生を中心に10名程度の学生スタッフが集まり、プレ講座(6月)、A講座(8月)、B講座(8月)の3回の小学生向けプログラミング講座を実施。10名×3回＝計30名の参加があった。 **全体について** ・地元酒田市及び周辺市町村の図書館、資料館等、地域文化財の記録収集を行っている担当者と、先進地として本学と交流している秋田県大仙市アーカイブズの職員と一緒に、シンポジウム及び意見交換を行った。 ・シンポジウムについては荘内銀行の「公益信託荘内銀行ふるさと創造基金」の助成資金を得て開催した。 ・公益学部各コース横断の研究推進4チームの打ち合わせ会議(5回開催)を行い、進捗状況を確認するともに、シンポジウム・研究発表等の準備を行った。 ・ブランディング推進各チームそれぞれに研究発表(広島、島根、本学)で研究発表を行うとともに、研究発表の概要を「平成30年度ブランディング事業関連論文集」にまとめた。(この論文集は東北公益文科大学リポジトリーより学外でも閲覧可能) ・本学のマルチプロジェクト研究機構内に設置した「文化財デジタル化研究所」の活動として、凸版印刷に研究員を依頼。地域のさまざまな文化財のデジタル化について意見交換を行なった。 ・オープンキャンパス等での高校生の認識度調査、入学生アンケート等、学内外でのアンケート調査も積極的に行なった。地域住民アンケートについては、酒田市産業フェア(10月)に本学として初出展し、市民と交流しながらデータを収集した。 ・これまで地域活動に取り組んできた鶴岡市加茂地区・酒田市日向地区の住民を対象に、地域文化財の保存と伝承についてのニーズ調査とヒアリング調査を行った。
④30年度の自己点検・評価及び外部評価の結果	(自己点検・評価) 採択直後から本事業の発信事業に力を入れてきた。 30年度当初から着手した「小学生向けプログラミング講座」は酒田市教育委員会から協力をいただき、酒田市内の全小学5～6年生を対象にチラシを配布。夏休み当初であったこともあり、保護者ともに非常に好評だった。この講座運営に参加した学生が中心となり、その後の学会発表やプレゼン等で多くの研究発表の機会をいただいた。島根県松江市の「プログラミング少年団」の取り組みなどと交流が生まれたことも、大きな成果となった。 採択初年度から取り組んできた民俗芸能をモーションキャプチャでデータ取得し、アニメーション化する取り組みは30年度7演目を採取し、順調に研究が進んでいると評価できる。平成30年度は庄内地域の農園から協力いただき、手指のモーションキャプチャとVRを使ったバーチャルサクランボ狩りを試行し、研究応用にも着手したことは評価できる。 本事業の取り組みの状況を、酒田市産業フェア等への参加により地域企業に知っていただけたことも大きな成果となった。今後と地元企業との交流を図りながら、事業を推進していく。 地域資源のデジタル化に取り組んできた学生が、「準デジタルアーキビスト資格取得講座」への参加を希望し、2名が資格取得に繋がったことは評価できる。 (外部評価) 平成30年度は研究実績がまだ途上である、という学長の指示を受け、研究推進チームの合意により、外部評価委員会という形では開催しなかった。しかし、学外で開催したシンポジウム・研究発表・イベント等で市民及び企業、また高校生、新入生等にアンケートを実施し、外部からの認知度の確認は随時行い、事業評価に役立てた。 また、本事業について、理事会、評議員会(9月と5月)に進捗状況を報告し、意見を聞いた。 本事業でデジタルアーカイブに取り組んできた加茂地区が2019年5月20日に日本遺産(北前船寄港地・船主集落)に追加認定された。認定にあたって、本学が収集した資料、またドローンによる町並みの記録等を活用していただけたことは大きな成果と言える。 広報さかた(2019年5月1日号)の特集の中に本事業が取り上げられた。これは、本学で依頼したものではなく、酒田市独自の企画ページに取材を受けたもので、行政から本事業および本学の認知度が向上してきているものと評価できる。2019年度は鶴岡市からも取材依頼を受けており、研究実績が確実に浸透しているものと評価できる。 結果として平成31年度入学志願者、入学生ともに増加した。特に志願者が70名以上増加したことは、大学全体の認知度の向上していると言える。
⑤30年度の補助金の使用状況	庄内地方の地域資源・民俗芸能のアーカイブ化について、より高い精度で記録するため、下記の通り研究設備を購入した。 ①映像・画像処理用ノートパソコンを平成30年6月21日に購入 ②ドローンを平成30年7月30日に購入 ③動画変換処理用ノートパソコンを平成30年8月22日に購入 ④モーションキャプチャ装置を平成30年11月7日に購入 ⑤映像・画像処理用デスクトップパソコンを平成31年3月19日に購入 これらの設備を使用し、新たなデータの収集も行い、計画通りに研究のブランディング化を推進した。